

鯉沢雪の夜嘯（小室山の御封、玉子酒、熊の膏薬）

三遊亭円朝

青空文庫

これは三題噺だばなしでございます。○「ひどく降ふるな、久ひさしいあとに親父おやぢが身延山みのぶさんへ参詣さんけいに行いつた時にやつぱり雪ゆきの為ために難澁なんじふして木きの下したで夜よを明あかしたとのことだがお祖師そしさま様の罰ばちでもあたつてゐるのかしら、斯かう降ふられては野宿のじゆくでもしなければなるまい、宿屋やどやは此このきんじよ近所きんじよにはなし、うム向むかうに灯ひが見みえるが人家じんかがあるのだらう。雪ゆきを踏ふみ分わけくそれに近ちかよりました○「御免ごめんなさいまし。女おんな「どなたです。○「私わたしは身延山みのぶさんへ参詣さんけいに参まゐつた者ものですが、雪ゆきの為ために難澁なんじふして宿屋やどやもなにもないやうでございますが、まことに何どうも御厄ごやくか介かいでございませうが今こんばん晩ばんたゞ夜よを明あかす丈だけでよろしうございませう、何どうか御厄ごやくか介かいになりたいいものでございませうが、如何いかゞでございませう。女おんな「それはお氣いきの毒どくさままですねえ、お入はいんなさいまし、別べつに御馳走ごちそうと云いふものはありませんが、そこは開あきますからお入はいんなさい。○「はい有難ありがたうございませう。笠かさを脱とつて雪ゆきを払はらひ内うちに入はいると、女おんな「囲炉裡いろりに焚火たきびをしてお当あたんなさいまし、お困こまなすつたらう此このゆき雪ゆきでは、もう此このちかく近へんぴは辺僻へんぴでございまして御馳走ごちそうするものもございませう。○「何どういたしましてお蔭かげさま様さまで助たすかりましてございませう。女おんな「そこに木きの葉はがありますよ、焚たき付つけがありますから。囲炉裡いろりの中なかに枯木かれきを入いれフーツと吹ふくとどつと燃もえ上ありました。その火ひの光ひかりでこゝに居をります女おんなを見

ると、年頃は三十二三服装は茶弁慶の上田の薄い襦袍を被て居りまして、頭髮は結
 髪でございまして、目もとに愛嬌のある仇めいた女ですが、何うしたことか咽喉から
 頬へかけて突いた様な傷がございまして。女「そこへ草鞋を踏込んでお当んなさいまし。○
 「有難うございまして……お内儀さんえ、間違つたら御免なすつて下さいまし、人違ひ
 と云ふことはございましてから、あなたはお言葉の御様子では此の鰯沢のお生れではな
 いやうでございまして。女「さうですよ、江戸で生れたんですよ。○「江戸は何の辺でご
 ざいますか。女「生れは日本橋の近所ですが観音様のうしろに長い間ゐたことがあ
 りますよ。○「へえ観音様のうしろに……あなたは吉原の熊蔵丸屋の月の戸華
 魁ぢやアございせんか。女「おや何うしてわたしを御存知です。男「華魁ですかど
 うもまことにお見受け申したお方だと存じましたが、只今はお一人ですか。女「いえ配
 偶者があるんですよ。男「左様でございまして、私は久しい以前二の酉の時に一人伴があ
 つて丸屋に上り、あなたが出て下すつて親切にして下さつた、翌年のやはり二の酉の時
 に久し振りで丸屋へ上ると、あなたは情死なすつたと云ふことで、あゝ飛んだことを
 した、いゝ華魁であつたが惜しいことをしてしまつた、それからあなたの俗名月の
 戸華魁と書いて毎日線香を上げて居りますが夢の様でございまして。女「実はね情

死うを為しそこなひました、相手あひては本ほん町ちやうの薬くすり屋やの息子こさんで、二人とも助たすかりまして
 品しな川がは溜だめへ預あづけられて、すんでに女をんな太たい夫ふに出でる処ところをいゝあんばいに切きり抜ぬけてこゝに來き
 てゐますが。男おとこ「左さ様やうでございますか、今日けふは旦那だんなは。女をんな「商あきひに行いつて留る守すでございま
 す。男おとこ「何なにんの御ご商しやう売ばいでございます。女をんな「是これと云いふ職しよくはありませんが薬くすり屋やの息子こでござ
 いますから、熊くまの膏かう藥やくを練ねることを知しつて居をりますから、膏かう藥やくを拵こしらへて山やま越こえし
 てあつち此こ方ちを売うつてゐるのでございます。男おとこ「へえー芝しば居ゐにありさうですな、河かは竹たけ新しん
 七しちさんでも書かきさうな狂きやう言げんだ、亀ひ裂あ輝ぎれを隠かくさう為ために亭てい主しゆは熊くまの膏かう藥やく売うり、イヤ
 もう何ど処こで何どう云いふ方かたにお目めにかゝるか知しれませぬ。いくらか遣やらうとしたが小こ出だしの財さい
 布いふにお錢あしがありませぬから紺こん縮ちりめん緋びの胴どう巻まきの中ちゆうから出でしたは三さん両りやう、○「お内か儀みさんまこ
 とに失しつ礼れいでございませぬが、何なにかお土み産やげと云いつた処ところで斯かう云いふ仕し儀ぎでございませぬから、御ご
 主人しゆじんがお帰かへりになつたら一ひと口くち何どうぞ上あげて下くださいませぬ。女をんな「すみませぬねこんな御ご心
 配はいをなすつては、あなたお酒さけは上ありますか。○「些すこし位くらゐはいたゞきます。女をんな「こゝは田あな舎な
 でいやな香かがありますか玉たま子ご酒けにするとその香かを消くすさうでございませぬ、それに暖あたつて
 宜ようございませぬ。爛か鍋なべを囲あ炉ろ裡りにかけて玉たま子ごをニツ三さんツポんく〜と中ちゆうに入いれましたが早さ
 速つくたまひ酒さけが出來できました。女をんな「此この湯ゆ呑のみでお上あんなさいませぬ、お酌しやくをしませう。○「久ひさ

し振りであなたにお目にかゝつてそのお酌で頂くのはお祖師様の引き合せでございませう、
 イエたんとは頂きません。女「さぞくたびれたでございませう、此次の座敷はきたなく
 つて狭うございませうが、蒲団の皮も取り替へたばかりでまだ垢もたんと付きませうから、
 緩くりお休みなさいまし、それに以前吉原で一編でもあなたの所へ出たことがあるん
 ですから、良人に知れると愠気ではありませんが、厭な顔でもされるとあなたも御
 迷惑でございませうから内々で。○「へえーいえもうやきもちを焼かれる雁首でも
 ありませんが、人情でございませうから、まるつきり見ず知らずで御厄介になります。
 女「お休みなさいまし。○「それでは御免下さい。次の間に行く。あとに女は亭主が帰
 つて来たならば飲ませようと思つて買つて置いた酒をお客に飲ましてしまつたのですから、
 買つて置かうと糸立を巻いて手拭を冠り、藁雪沓を穿きまして徳利を持つて出かけ
 ました。入れ替つて帰つて来たのは熊の膏藥の伝次郎、やち草で編んだ笠を冠り狸の
 毛皮の袖なしを被て、糧切は藤づるで鞆が出来てゐる。これを腰にぶらさげ熊の膏藥の
 入つた箱を斜に背負ひ鉄雪沓を穿いて、伝「オイおくま、オイお熊どこへ行つたんだな、
 おくま、手水場か、めつぽふけえ降りやアがる、焚火をしたまゝ居ねえが今頃どこへ行
 つたのだらう、女房は堅気にかぎると云ふが、あんな女を鼻アにすると三年の不作だ。

まは がつば 笠をかき ぬ 壁にかけ、伝「何んだ 玉子酒をして食ひやがつて、亭主は山
 し合羽に笠を脱いで壁にかけ、伝「何んだ 玉子酒をして食ひやがつて、亭主は山
 越をして 方々 商をしてゐるに、嬢アは 玉子酒をして食やアがる、まだあまつてゐ
 るが飲んでやれ、オイ誰だおくまか、どこへ行つたんだ。女「ちよつと徳利を取つておく
 れ 雪沓を踏み込んで……紐が切れたんだよ。伝「いろんな事を云つてやアがる、待て
 \、ウームア、痛いウム、オイお熊 軀 中しびれて……こつちへ入つて背中を二ツ三ツ
 叩いてくれ。女「何うしたんだな、しやうがねえな、方々へ行つて酒を飲むからそん
 なことになるんだな。伝「飲やアしねえ、今日は治衛門さんのところへ行つても酒は飲ま
 なかつた、家を買つてあるのを知つてゐるから。女「それでも酒くさいよ。伝「爛鍋に
 玉子酒があつたからそれを飲んだ。女「エツ、玉子酒を飲んだの……しやうがねえな、
 これはいけねえんだよ、お前が拵らへた 麻痺薬が入つてゐるんだよ。伝「ウム、おくま
 てめえは己を殺す了簡か。熊「何を云ふんだな、さつき 身延山へお参りに来た人が道
 に迷つて此処に来たが、それは 吉原にゐた時に出た客なんだよ、三両包んで出したが跡
 に 切餅（二十五両包）二俵位はある様子、それで 玉子酒に仕掛をして飲ましたが、そ
 の残をお前が飲んだのさ。これを次の間で聞いた客は驚いて逃げようとしたが毒がまはつ
 て 軀が自由になりません。○「太い女だ、ひどい奴があるもんだ、どうかしてもう一度江

ほふれんげきやう」と一心にお題目をとなへてゐると箴はだんくづれて自分の乗つてゐる一本になりました。そこへ追つて来たおくまは岩に片足をかけて狙を定めて引きがねを引くとズドンとこだまして筒をはなれた弾丸は旅人の髪をかすつて向うの岩角にポーンと当りました。○「アツ有難いたつた一本のお材木で助つた。

(註。最初此話は芝居話でしたがおくまの弾丸をのがれての白を左に記して置きます、)

「思ひがけなき雪の夜に御封と祖師の利益にて、不思議と命助かりしは、妙法蓮華經の七字より、一時に落す釜ヶ淵、矢を射る水より鉄砲の肩を擦つてドツサリと、岩間に響く強薬、名も月の輪のおくまとは、食ひ詰者と白浪の深き企みに当りしは後の話の種ヶ島危ないことで……(ドンくくくく激しき水音) あつたよなア——これでまづ今晚はこれぎり——。」

(一朝口演、浪上義三郎氏筆記)

青空文庫情報

底本：「明治の文学 第3巻 三遊亭円朝」筑摩書房

2001（平成13）年8月25日初版第1刷発行

底本の親本：「定本 円朝全集 巻の13」世界文庫

1964（昭和39）年6月発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5186）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2009年6月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鯉沢雪の夜嘯（小室山の御封、玉子酒、熊の膏薬）

三遊亭円朝

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>